

我が歩み — 研究・学問・師友 —

竹 長 吉 正¹

〈その1〉 国語教育四十八年

これからわたくしの国語教育人生四十八年を回顧して、いささか気づいたことを述べてみよう。といっても、四十八年間、国語教育ばかりをやってきたわけでないし、また、国語教育一筋といった熱意で取り組んできたわけでもない。他の人より幾らか多くの時間を国語教育という仕事に割^きいてきたので、後の人に参考になることが幾らか言えるのではないかと思う次第である。

さて、わたくしが国語教師として初めて教壇に立ったのは昭和四十四年の四月である。埼玉県羽生という町の定時制高校だった。五十八名ほどの女子生徒を相手に現代文や古文、漢文を教えた。その頃の高校の国語教育は知識伝授、知識詰め込みの教育が主であった。文学史、文法、漢字、古語の意味などをわかりやすく解説し、それらを覚えさせ、後で試験をするというやり方であった。大学で受けた講義とほぼ同じやり方であった。つまり、大学教授が学生に講義するのと殆ど同じやり方で高校教師は生徒に芥川龍之介の「羅生門」や、枕草子の「春はあけぼの」、杜甫の「春望」などを教えていたのである。

この後、同じ埼玉県の菖蒲という町の全日制高校に移った。定時制の高

¹白鷗大学教育学部

校と違うのは、生徒の考え方が幼いことだった。定時制の生徒は働きながら学んでいるので、社会性というものが備わっていて、いわゆる「大人びている」、それに対して全日制の生徒はいかにも幼いという感じだった。このことは授業の中でも考慮せざるを得なかった。初めは静かに教師の話を聞いているが、そのうち退屈し、うつむいてしまう。そこでわたくしは考えた、何とか生徒を授業の中に引き入れることをしなければならないと。それから生徒に身近な教材を開発して与え、それについて作文を書かせたり、意見を発表させたりという方法をとった。国語教科書に載っている教材については他の教師と打ち合わせて共通のものを決めておき、それのみを取り上げることにした。その他は自分で教材を開発して生徒の興味・関心を引くものを用意した。郷土の文学作品「貧しき一家」(馬場青葉)などを取り上げ、生徒に自分たちの周囲の出来事や風景を振り返って考えるという機会を与えた。

定時制高校に六年、全日制高校に一年勤めたあと、海外から帰ってきた生徒、いわゆる「帰国生徒」のみの高校に移った。その高校は東京の練馬区大泉学園にあったので、片道二時間近くかけて通うことになった。ここでの授業は十五人から二十五人までの少人数で、わたくしも生徒も共に、肩の力を抜いてのびのびと学び合うことができた。そういう点ではとても素晴らしい学習環境であった。これはわたくしだけのことではないのかもしれないが、大勢の人を前にすると上がるというのではないが、何か決戦を前にして緊張するというか、ぐっと肩に力が入ってくるのである。それを意識することができればそれだけで既に心に余裕があるのだが、たいていは無意識である。そこで、後からぐったりと疲れるのである。授業をやり終えて教員室に戻ってくると、ふうっと溜息^{ためいき}をつき煙草でも吸うか、コーヒーでも飲むか何かしたくなるのである。教師という仕事、人に物事を教えるという仕事、それは大変な緊張感を伴うものである。ストレスのたまる仕事なのである。それを幾らか和^{やわ}らげることができれば、これほどありがたいものはない。そういう点でこの高校で少人数制をとってくれていた

のはありがたかった。

帰国生徒ばかりの高校で、わたくしはいろんな試みを行った。先ず第一に、話しことばの教育に取り組んだことである。海外での生活体験を豊富に持っている生徒に、それをまず、スピーチさせ、お互いの理解を深めようとするものだった。学習者どうしの相互理解を深め、かつ、その言語活動を通して「言葉の力」がつくようにと意図したのである。第二に、作文をたくさん書かせたことである。生活文、虚構作文（空想の作文、ファンタジーなど）、説明文、レポート（報告文、特に読書と作文をつなげた「読書レポート」）など、文種は^{かたよ}偏りなく、様々なものを書かせた。こうして、生徒に言語表現させることに力を入れた。その背後にあったわたくしの考えは、「新しい、今の生活綴方」を実現するというものである。当時、わたくしが親しくさせていただいた吉田瑞穂先生から、こんな話を聞いた。「自分が九州佐賀から東京江東の東大島に転勤したとき、周りの友人たちは『吉田はもう生活綴方はできないだろう。』と言った。九州の田舎村でこそ生活綴方の教育はできたが、東京の都会の学校でそれはできないだろうという、見限りの言葉だった。それをぼくはいや、やってみせると心の中で叫んだんだ。そして、東大島の小学校で実践した。東大島は下町の工場地帯だ。そこで、『煙の町の綴方』と名づけて作文や詩を書かせ、それらを文集にしたんだ。」わたくしはこの話を聞いて自分にも思い当たるものがあるのに気づいた。埼玉の田舎の高校から東京の高校に転勤するとき、わたくしも似たようなことを周りの人から言われた。しかし、どこへ行っても学習者にその足もと及び、自分の今立っている地点を深く見つめさせる教育は可能なのではないか、そう思ったのである。この信念は吉田先生の話聞いてますます強固になった。吉田先生を通して学び取った教育の考えや方法を帰国生徒の国語教育に応用していったのである。

こうして、わたくしの国語教育は次第に表現重視になっていった。生徒に表現させることを通して、彼らが自分の足元を見つめ、そして、言語の力をつけていく、そのような教育の形であった。ちょうど折しも、現職教

員派遣の大学院入りを勧められ東京学芸大学で二年間、国語教育を学ぶことになった。わたくしはこれ以前、大東文化大学の大学院で近代文学を学んだ。それは羽生の定時制高校で教鞭をとっていた頃のことである。当時、定時制高校の勤務は概して、昼間は空いていたので大東文化大学の大学院に通えたのである。大東文化の大学院では主として稲垣達郎教授に教わり、夏目漱石の研究を行った。その頃のわたくしは国語教育を行いながら、文学研究者を目指していた。

しかし、大泉の高校で帰国生徒に国語を教えているうちに、国語教育の面白さを感じ、また、国語教育の奥深さに気づいた。そこで、ちょうど良い機会だと思って学芸大学の大学院で学ぶことにした。学芸大学には力のある教授がたくさんおられたが井上尚美教授と田近洵一教授、わたくしはこのお二人に多くのことを教えられた。大学院では西尾実の国語教育論を主として研究した。西尾実が自分自身、文学が好きでありながらもそれにわくでま惑溺することなく、それを対象化し、それよりもっと地盤に位置する「話しことば」や「書きことば」に目を向けて、彼流の言語文化教育学の体系を作り上げていく、そのようなプロセスに感動した。

東京学芸大学の大学院を修了すると同時に、埼玉大学教育学部国語国文学科の専任講師として勤務が配置換えになった。前任の高校が国立大学の附属であったからである。定時制高校六年、全日制高校一年、国立大学の附属高校七年の計十四年間の高校勤務を経て大学教師になった。時に昭和五十八年四月、三十六歳であった。大学では国語科教材研究、国語科教育法、国語科教育研究法、近代文学講読などの科目を担当した。近代文学講読は、当時附属養護学校の校長を勤められていた日沼滉治先生の手助けで受け持った。また、当時学科主任は萩原昌好助教授だった。わたくしが着任したときの国語国文学科のスタッフは、松本旭教授（国語教育、近世文学）、緒方暢夫教授（漢文学）、日沼滉治教授（近代文学）、木越隆教授（中古文学）、外山映次教授（国語学）、根上剛士教授（国語学）、萩原昌好助教授（中世文学）、青木勝彦助教授（国語学）の八名であった。八名の先輩の

中に加えさせていただき埼玉大学で勤務することになった。

当時、わたくしは三十歳代の半ばであり、大学教師としてはまだまだヒヨコであった。であるからして、ずいぶんむちゃなこともした。あるクラスでは、最初の講義のとき、自己紹介をして歌が好きだといったら、ある学生がここで何か歌えと言う。そこで、つい、おだてにのって教室で歌を歌ってしまった。大学の授業に慣れてくると、つい厳しい面を出して学生を窮地に陥れてしまう。別に学生を窮地に陥れて楽しむなどというサディズムは持ち合わせていないが、高校生と違って君たちは大学生なのだからもっと勉強してよかろうというわたくしの考えから学生たちを苦しめたのである。そして、当時の学生はそうしたわたくしの苦しめ方によく向き合い、努力した。「よくがんばった。本当に心からほめてあげる。俺はよほどのことがない限り、人をほめることをしないたちのだが、今度の君は本当によくがんばった。」そう言って学生の手を取って握手したりした。鍛え上げることが好きで、わたくしはよくそうやって学生を指導してきた。それは授業においても、研究室のゼミにおいても変わらなかった。

それが次第に変化してきた。いや、学生たちの変化と同時に、わたくしの指導の仕方もそれに応じて変化を余儀なくされたのである。それは我が国における「大学の大量化」現象と関係している。大学へ行くのも東京ディズニーランドへ行くのも変わらないという学生たちが大学のキャンパスに溢れ出したからである。教育というのは、教材、学習者（児童、生徒、学生）、教師の三つが関係して行われる。教師が教材を用意してこんなことを教えたいと意図していても、学習者が動かなくては教育という営みは始まらない。三つの中で一番大きな位置を占めるのは学習者である。学習者の意欲・関心・態度が教育の方向や姿を決定する。そこで、わたくしも学習者の研究から始めた。

今の学生はいったい、どんなことに興味・関心をもっているのか、その辺をリサーチすることから始めた。教師という職業は、いつの時代になっても、「今ここで」を意識しておかなければならない。教師も年をとる。す

ると、だんだん保守的になり、自分の考えにこだわるようになる。自分の体験・経験にこだわり、新しいことに挑戦するのが億劫^{おっくう}になる。自分の考えや体験にこだわればこだわるほど、若い人の考えを受け入れにくくなり、否定したくなる。わかる気もするが、それでは教師としての自分は取り残されていくばかりだ。人よりも新しいことに飛びつく必要はないが、それでも少しはこの世の中のことに関心を持ち、若い人と共に肩を並べて歩けるように、「心」や「精神」のリフレッシュを心がけていなければならない。わたくしは自戒を込めてそう言う。「若い人の悪口を言うようになったら教師という職をやめるべきだ。」

大学の教師になって教員養成の仕事に多く携わるようになった。そこで、今までのわたくしの国語科教育の仕事の中に新しく、「国語科教師論」が加わった。教師とはどうあるべき存在か、また、生涯^{わた}に渡って教師を続けていくためにはどんな生き方をすべきであるかなど、国語科教師の思想的基盤、いわゆる「国語科教師の哲学」を説く必要がでてきたのである。もちろん、大学の教員養成学部に入學したからといって全ての学生が教員を志望しているわけではないし、また、本人がいくら志望していても客観的に見てどうしても教員になれそうにないという学生もいるようだ。しかし、そうした事情はどうであれ、ともかく、わたくしの与えられた科目の中で国語科教師とはどういう仕事をして、何を指すものかを学生に説いている。以下は、その話を中心にする。また、それと連動してわたくしの国語教育学者としての仕事の推移についても述べる。

わたくしの国語教育研究は、おおむね次のように整理することができる。

第1．文学教材の研究及び文学教育についての研究

著書『文学教育の坩堝』『児童文学の表現構造』『現代児童文学の課題』『読者論による国語教材研究』全2冊（*小学校編、中学校編）

第2．説明文教材の研究と、説明文指導の研究

著書『説明文の基本読み・対話読み』全3冊（*理論編、小学校編、

中学校編)

第3. 書くことの指導研究及び作文指導研究

著書『読書レポートの誕生』

第4. 読書指導の研究

著書『読書レポートの誕生』

第5. 音声言語指導の研究

著書『帰国生徒の言語教育』

第6. 帰国生徒の言語指導（特に漢字を含む）研究

著書『帰国子女のことばと教育』『帰国生徒の言語教育』

第7. 教材研究一般（特に文法を含む）の研究

著書『授業に生きる教材研究』

第8. 言語感覚の指導研究

論文「言語感覚教育の歴史と課題」他

第9. 国語教育史の研究

論文「西尾実の創作学習観」他

このように整理してくると、わたくしの国語教育研究の流れが次のようなものであったと判断することができる。最初は文学教材の研究や文学教育の研究が主であった。これは後、読者論や言語感覚の研究へと展開し発展していった。次に、書くことや話すことといった言語表現の指導に関する研究がある。これは後に、読書の指導と結びついて「読書レポート」という新しい分野の開拓に発展した。さらにもう一つ、国語教材の開発研究がある。わたくしはこれまで高校や小学校の幾つかの教科書編集に関係したが、今もなお強く思うのは、国語科教師は既成の教科書に頼らず自ら進んで教材開発すべきであるということである。文学教材も説明文教材も自分で開発した経験がある。それなりの苦労もあるが、学習者が目を輝かせてそれらの教材と取り組むのを見て、わたくしは苦労が報いられたような思いがした。特に作文や音声言語の指導においては既成の教科書は殆ど参

考にならないので、教師が教材開発をしなければならない。「国語科の教師は教科書があるから楽だ。教材開発をしなくてもすむんだから。」と、そのように考えている教員が比較的多い。しかし、その考えは誤りである。既成の教科書に頼ることなく、自ら教材を開発できる能力を身に付けておかなければならない。良い教材をどれくらい開発できるか、それが国語科教員の力量を判定する尺度になる。

さて、わたくしの四十八年の国語科教師としての実践及び、教育研究の中から、国語科教師として考えておかなければならないことをまとめて以下、述べておく。

第一に、教材研究の大切さである。教材研究に始まり教材研究に終わる。教材研究にゴールはない。死ぬまで続く道である。そのように思って、教材を慈^{いつく}しみ、教材と長く付き合うことである。その中から教材の奥深い意味にたどり着くことができる。教材研究をおろそかにしてはならないのである。

第二に、学習者の研究である。学習者の興味・関心はもとより、学習者の心理を深く研究しておくことである。そのためには心理学を勉強すべきである。

第三に、文学（特に児童文学及び学習者の読む新しい文学）、言語学、国語学についての幅広い素養を身につけるべきである。

第四に、自ら読み、書き、話し聴く人であること。「生涯読書人」「生涯記述人」「生涯話聴人」という言葉がある。他人に言語活動を教えようとする人は自ら、その言語活動を絶えず行っている人でなければならない。

第五に、国語教育を何のために行うか、その自覚を持つことである。これについては人によって種々、異なるところがあるかもしれない。しかし、いずれにしても国語教育を行うものは自らの国語教育観をしっかりと持つべきである。もちろん初めから、そのような観をもつことは不可能であるが、経験年数を積むごとに、それが次第にできあがっていくように自らを磨いていくべきである。

皆さんの国語教育観の形成に幾らか参考になるかも知れぬと思い、以下わたくしの国語教育観を述べておく。わたくしは国語教育を次のような考えに基づいて行ってきたし、また、これからも行っていく所存である。それは学習者一人一人の「しあわせ」を願って、その「しあわせ」をつくり出すための「言葉の力」をつけてあげたいということである。それ以外に国語教育の目標を考えない。国家に役立つ人材を作るため、その一環としての国語教育などという考えも他にあるようだが、わたくしはそういう国家の政策と結びついた国語教育には余り賛成できない。目の前にいる、一人一人の学習者、その一人一人の「しあわせ」を考え、言葉の力をつけたいと願う。一人一人の学習者の「しあわせ」をつくり出す国語教育、それならわたくしは自分の一生をかけても悔いはないと考える。皆さんのご参考になるならば、幸いである。

これからのわたくしの研究課題は、国語教育に限ると次のようになる。

第1. 西尾実研究

第2. 近代国語教育史の研究

第3. 言語文化教育学の一環としての児童文学・児童文化の研究

どこまでやれるかわからないが、天から与えられた寿命と、頭脳の命の健康が続く限り取り組んでみたい。

国語科教育に携わる人は、自分の力を過信せず、また、自分の力の無さにがいたん慨嘆せず、黙々と努力する人でありたい。そして、単に「言葉の巧みな使い手」であるにとどまらず、人間としての心の修養を目指す人でありたい。なぜ、そのように言うかというと、わたくしは国語教育というものを次のように考えるからである。国語教育は、単に「言葉の巧みな使い手」を作ることを目指すものではない。日本語をよく読み、日本語でよく書き、また、日本語をよく聞き、日本語でよく話す、そういう児童・生徒を作るのが、国語教育の大きな使命である。しかし、これだけであると、国語教育

は単なる技能教科になってしまう。国語教育は技能教科プラスアルファでなければならない。プラスアルファが、良き人間性である。いくら「言葉の巧みな使い手」を育てても、その使い手がその身に付けた言語技能を人をだましたり人を殺したり、人のものを奪ったりすることに使ったらどうであろうか。これではいったい、何のために言語教育を施したのかわけがわからなくなってしまう。しかし、世の中が複雑になり色々な人間が出てくると、中にはそのような人間も出てくる可能性は高い。そこで、言語教育としての国語教育は言語技能を培うだけでなく、「良き人間性」を培うという目標を掲げる必要がある。このように言うと、多くの人はすぐに、「ああ、それは国語教育も道德教育でなければならないということでしょう。」と反応する。しかし、国語教育は道德教育とは違う。道德教育は徳目主義であり、教材の選択も教材を通しての指導も全て、「徳目の教授・伝達」を使命としている。これに対して国語教育はあくまでも言語指導に力点をおく。しかし、その言語指導の人間形成的価値の方向が「良き人間性の育成」に向かっているのである。わたくしはこのことを恩師の一人増淵恒吉先生から教わった。増淵先生はわたくしの大泉校舎勤務時代に親しくさせていただいた先生である。先生はあるとき私にこうおっしゃった。「国語教育における人間育て、人間育成というのは、言語指導に密着して行われるものだ。言語指導と人間性の指導とがそれぞれが別々に切り離して行われるのではない。そして、大事なのはいつも出発点が言葉の指導であることを忘れてはならない。そして到達点、すなわち、言語指導の行き着くところは人間高め、人格の向上だ。」わたしはこの言葉を聞いて、それこそ目から鱗うろこが落ちた。それまで文学教育のことを考えていて、文学教育において言語的な指導と人間的（人格的）な指導と、この二つをどう折り合いをつけるかで悩んでいたからである。増淵先生からこの示唆を得てわたくしは国語教育におけるわたくしの最初の著書『文学教育の坩堝』のサブタイトルを次のようにした。すなわち、「ことばを通しての人間再生るつぽ」である。このサブタイトルに込めたわたくしの国語教育観は、言語の指導を行うことを通

して学習者の人間性を高めていこうとする考え方であり、それはまた、わたくしの本を読んでくれる人々へのメッセージだったのである。

分析すると国語教育の機能には学習者の言語技能を高めるという面と、学習者の人間性を高めるという面がある。しかし、この二つを切り離したり、また、別々のものと考えたりするのではなく、この二つを一つのものにして考える、つまり、二元的に考えるのではなく一元的に考えることの大切さをここで強調しておきたい。そしてもう一つ、国語教育の国語教育たるゆえんは、すなわち、国語科教育の独自性というのは、言語の指導というものを「通して」（媒介にして）というところが大事なところであるが、そういう形で「人間性の教育」を行うところに存する。わたくしのこのような考えは今も変わっていない。なぜなら、これは永遠不変の真理だと判断するからである。

さらに、最後に二つのことを述べておく。一つは、国語教育に期待されているものについてである。国語教育は目に見える形で学習者の生活に役立つものと、目に見えにくい形で学習者の人生に役立つものがある。教師としては二つとも大事にしたいわけであるが、学習者本人及びその保護者の希望は著しく前者に傾いている。それは嘆かわしい事態であるのだろうか？ 皆さんはどう思われるのだろうか？ わたくしは少し嘆かわしいと思うが、それも時代の変化であるのだから、ある程度仕方がないと寛大に受けとめている。人間の住む社会が世知辛くなると、余り生活実用的でない、いわゆる「教養」的なものは知的アクセサリー（飾り）と見なされる。そうした傾向を嘆かわしいと慨嘆したり、それに対して反旗を翻ひるがえすような「抵抗」を試みたりしても、多くの人はおそらくついて来ないだろう。教育という営みは大衆的なものだから多くの人々の賛同を得られなければ成功しない。よって、今の国語教育がどこを向いているのかをしっかりとつかむ必要があるのである。

もう一つ述べておきたいのは、今の学習者の特徴についてである。これは国語教育の、主として音声言語の指導に関して参考になることかと思う。

それは昔の学習者は概して、「権威」というものに弱かったが、今の学習者は「権威」など余り意識することがないということである。昔の学習者は、年長者の話や権威者の話は、たとえつまらないものであっても、がまんして静かに聞いたものである。それは親、校長先生、村長・市長、大学教授などの話は、いくらつまらないものであっても、聞き手は彼らの権威にひれ伏していたからである。今は、話し手の権威で聞くということがない。すなわち、話し手の話の中身や、話し手の話し方の技わざに惹かれて聞くことはあっても、話し手の権威（肩書き）で聞くということがない。それゆえ、親や教員や政治家は、肩書きや権威で、自分の子や生徒、あるいは市民に話を聞かそうとするのではなく、自分の話の中身の魅力、あるいは、話し方の魅力によって聞き手を引きつけるように努力しなければならないのである。それだけ今の親や教員は努力が必要になったのである。この努力をしないで、相変わらず、昔ながらの流儀で子どもたちに話を聞かそうとすると、そっぽを向かれてしまう。昔の聞き手が「素朴」であったとするなら、今の聞き手は「進歩」している。それゆえ、親や教員は勉強しなければならないし、また、技を磨かなければならないのである。

色んな話を長々とさせてもらったが、幾らかでも皆さんの参考になるものがあれば幸いである。

〈その2〉 研究・学問・師友

わたくしの今までの経歴で年若い方々の参考になることがあればと思って、少しばかり回顧談をいたします。わたくしと似たような境遇の方もあるかもしれませんし、ないかもしれません。

この前、古いカセットテープを聞いておりましたら、八木義徳やぎよしのりという作家が師の横光利一よこみつりいちの話をしていました。「横光先生は私たち弟子に向かって、『誰でも人生には二度、潮時しおどきというものがある。その潮時を逃がさないようにしなさい。その時、波に乗れば望みを達することができるから。』

とおっしゃっていた。」

横光利一という小説家を今の若い人はあまり知らないと思いますが、わたくしにとっては少なからぬ思い出があります。そう申しても、わたくしが横光に実際、会ったことがあるというわけではありません。八木義徳と同じように、やはり、横光の弟子であった^{ただ ゆうけい}多田裕計という小説家にはよく会っていたのです。

多田先生からいろいろと話を聞いていて、横光利一に関心を抱いていたわけです。まあ、こんな話をしているときがありませんから、本題に向かっています。ともかく、横光という人は不思議な人だなあと思います。ちょっと予言者のようなことを言うんです。それから、とても人に対して思いやりのある人で、弟子であった人たちは（先ほどの八木や多田を含めて）みな、口々に横光のことを懐かしく思い出しています。

例えば、弟子が先生の家を訪問して、帰る時、先生は奥さんと並んで玄関まで来て見送ってくれたとか、また、弟子が戦争に行くとき、夜汽車のプラットフォームに見送りに来て、『がんばるんだよ！』と言って封筒を渡してくれたという。汽車が発車してから、封筒の中を開けたらお守りが入っていた。『これは小生がヨーロッパに行ったとき、肌身離さず身につけていたお守りです。君にご加護のあることを！』など。こういった次第です。

横光利一に関するエピソードを知れば知るほど、彼は義に厚い人情家なのだということが、よくわかります。こういう先生なら、誰でも喜んでついていくでしょう。しかし、横光は小説に関してはとても厳しく、弟子たちは「ダメ！」と大きな声で何度も注意を受けたようです。だが、横光は、どこがどう悪いとか、どこをどう直せばよくなるなどということは一切言わなかったそうです。極めて直感型の人ですから、よくないのはよくない、いいのはいいであった。

また、弟子というわけではありませんが、中村真一郎さんは旧制高校の学生であったとき、初めて横光に会い、即座に、「君は小説を書くより評論を

書きたまえ」と言われたそうです。自分は小説が書きたくて横光のところに行ったのに、そう言われたので不服そうに、「どうしてですか？」と尋ねると、「君は西洋哲学をやる人のような顔をしている。だから、そう言った。今、小説を書きたいという人間はたくさんいる。だが、評論や、研究をやる人間は極めて少ない。君がその先鞭^{せんべん}をつけると愉快になるのだからなあ。」

こうしたエピソードを集めて横光利一という人間について考えると、恐ろしく旧時代の人間のような気がいたします。非科学的で、非論理的で、直感に頼って物事を判断する。しかし一方、義理や人情に厚く、何とも言えない人間的な魅力にあふれている。人柄のことや何かを言われると、わたくしなどはどこかに隠れたくなるような存在で、実に魅力に乏しい。しかし、横光の言う、人生における「二度の潮時」を信じて生きてきて、「ああ、よかった」と思うことがあります。

わたくしは小説家などの道でなく、学問や研究という道をこれまで歩いてきたわけですが、それを振り返ると、確かに、「二度の潮時」(二回、波に乗れた時)がありました。一つは、昭和55年(1980)8月8日、全国大学国語教育学会第七回石井賞を受けたことです。これは国語教育の若い研究者におくられる、いわゆる、「国語教育研究の芥川賞」です。一年前に出した『文学教育の坩堝^{るつぽ}』という本で受賞したわけですが、これに関しては、わたくしは自分の努力もさることながら、学恩、師恩、それに、運ということをつくづく感じております。自分が、それまで歩いてきた文学研究の道から、新たに国語教育研究の道へ力強く踏み出す一歩であったわけですが、その一歩を後ろから押してくださった恩師、先輩、知友の存在をひしひしと感じて、それこそ、身の引き締まる思いがいたしました。特に田近洵一先生、井上尚美先生、増淵恒吉先生にはお世話になりました。

もう一つの潮時ですが、それはなかなかやってきませんでした。人生とは、よくできたもので、いいことばかりが続くわけではなく、また、悪いことばかりが続くわけではありません。大切なことは、どんな時も、願

や希望を忘れず、持ち続けることでしょう。友人や先輩、恩師などから勧められて、ある時期から、わたくしは一つの願望を抱き始めました。それは、東京学芸大学の大学院（修士課程）で研究の緒に就いた「西尾実の国語教育論に関する研究」を完成させることでした。大学教員として二十一年目を過ぎたころから、その願いがふつふつと湧いてきました。七分通り出来上がったとき、田近洵一先生（当時、早稲田大学勤務）に見ていただきました。先生は、「今すぐに見て、どうとは言えないから、少し時間をくれ。」とおっしゃいました。それから約十カ月後、早稲田大学の先生の研究室におじゃまして、いろいろとご指導をしていただきました。「この中のいくつかは、どこかの学会誌に発表しておくといいね。」とおっしゃいました。帰宅して先生から戻された論文集を見ました。赤ペンでいろんなところに書き込みがありました。それを見ながら、恩師とは、いつになってもありがたいものだと思います。

ところで、そうこうしているうちに、時間はどんどん経って行きました。定年が近づき、わたくしにも焦りが出てきました。西尾研究を何とかして、定年までにかたをつけたいと思っていましたから。そんな中、母校（東京学芸大学）の大熊徹教授から、「論文を出したらどうですか？ 推薦教員になりますよ。」と親切な言葉をかけていただきました。ああ、そうだった！

灯台もと暗しとはこのことでした。いろいろと論文の提出先を探していましたが、連合大学院などを通して旧知の間柄である大熊教授から言っていたのだからと、ここでわたくしは、やっと「波に乗る」ことができました。こうして、思いがけぬ「潮時」がやっと到来したのです。それから、論文に再度目を通して完成させ、平成22年（2010）3月2日、東京学芸大学から教育学博士の学位を授与されました。

わたくしが国語教育研究の道に入ったのは、考えに考えぬいて入ったというわけではありません。さほど深く考えたわけではなく、大学を卒業して高等学校の教員になり、「教えること」と「学ぶこと」、それに「研究すること」に興味を持ったことから、こんなふうになったのです。高校生の時は、

フランス文学をやって外国に行きたいなあ、ぐらいにしか考えていませんでした。新聞社か雑誌社に入って、マスコミ、ジャーナリズムの仕事がしたい、と考えていました。大学生の時は、音楽関係の評論家になりたいと思っていました。しかし、ほんのちょっとしたはずみで高等学校の教員になり、教育に関心を持つようになったのです。実にお恥ずかしい限りです。その後は、恩師の導きで学校も変わり、国立大学の附属高校に転勤しました。

忘れてはならないいつも自分に言い聞かせているのは、埼玉県立の高等学校にいたわたくしを東京学芸大学の附属高等学校に呼んでくれた恩師橋本芳一郎先生のことです。

先生はある時、「何となく君の名が浮かんできてね。」とおっしゃいました。自分はそれほど学業優秀な学生でもなく、また、行動などが目立つ学生でもありませんでした。しかし先生は何となく、ふとしたことで自分の指導した学生のことを覚えてくれていたのです。わたくしは卒業論文に夏目漱石を選び、『草枕』に関する80枚ほどの論文を書きました。それを見てくださったのが橋本先生でした。その論文が今、手元にあるので、それを見て行くと、最後に橋本先生がボールペンで評語を書かれています。かくかくしかじかの部分は従来になかった見方であり評価できるなどという、至って短いものです。しかし、その筆跡を眺めると、先生のお宅（東京都練馬区東大泉）を訪問し、いろいろとお話を伺ったことが脳裏に浮かんできます。恩師は亡くなられても、教え子の心の中にはいつまでも生きています。そして恩師とは、いつになってもありがたく、しかも、脳裏を離れないものです。

ところで、わたくしは2010年（平成22年）3月、埼玉大学を辞め、同年4月、栃木県小山市の白鷗大学に勤めることになりました。栃木県は橋本芳一郎先生のご郷里であります。これも何かのご縁かと思いました。冥界で橋本先生が見ていらっしゃるかと思うと、うかつなことはできません。教育に、研究にいつそう励みたいと思った次第です。

さて、白鷗大学での七年間を振り返ってみます。

栃木県は倉澤栄吉先生や増淵恒吉先生という偉大な国語教育者を輩出した、素晴らしい県です。お二人の先生からそれぞれ温かい励ましのお言葉をいただきましたが、特に増淵先生からは、わたくしが高校の国語教師であった時、文法や言語事項の指導を大事にするようにと教えられたことが印象に残っております。当時、文学教材の指導に力を入れていたわたくしに、国語教育にはもっと別の「新しい指導領域」があるのだと教えてくれたのです。国語教育の領域は、例えば文章教材であれば、文学的文章だけでなく説明的文章という領域がありますし、また、「読むこと」であれば読解と読書という二つの領域があります。さらに、「読むこと」の他に「書くこと」「話すこと」「聞くこと」という分野があります。しかし、これだけでなく、文法（「ことばのきまり」）や言語事項（漢字・仮名遣いなど）という分野があります。

すなわち、国語教育の領域は、果てしなく広がっていくのです。大学生の時にわたくしが学んだことは、かなり多かったと思っていましたが、それは誤りでした。まだまだ、氷山の一角に過ぎなかったのです。

大学（四年間）で学び、また、二つの大学院（四年間）で学び、さらに、教育の現場で学びつつ、それでも、まだ足りないというのが、国語教育の「山」（全貌）であります。

教師を目指す皆さんは、この国語教育の「果てしない全体像（山）」を目標として、少しずつ登って行っていただきたい、わたくしはそう思います。

もう一つ、わたくしの経験から申し上げたいのは、教師になって初年から大学院で学ぶよりも、ある程度教師としての経験を積んでから大学院で学ぶ、例えば短くて七年、長くて十年以上教師としての経験を積んでから大学院で学ばれたほうが、研究課題もはっきりして意欲的積極的になれるのではないかと思います。

以上、国語教育のことを中心にして申し上げましたが、「教える職業」としての教員養成の点からは共通する点がたくさんありますので、参考にし

竹 長 吉 正

ていただけたら幸いです。

長くなりましたが、これでわたくしのお話を閉じさせていただきます。